陸上との出会い

+悠+

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
陸上との出会い

【Ｎコード】
Ｎ５３０７Ｄ

【作者名】
＋悠＋

【あらすじ】
陸上と出会って、陸上が好きになる…

陸上との出会い（前書き）

陸上の話だけど読んでみてください。
感想等いただけると嬉しいです。

陸上との出会い

中学一年。
部活という活動を始めた。
それで部活は友達と同じのに入った。
自分の希望ではないだけあってつまらない…
その時に見た陸上部。
その時見て思った…
「陸上をやりたい」と…
陸上部を見るといつもうらやましいなぁと思ってた。
そしていつの間にか陸上がやりたいと言う気持ちが大きくなっていった。
そして親に相談した。
そして見つけたのが陸上クラブ。
陸上クラブを見たときはかなり目を輝かせた。
やってみたかった陸上。
それが今目の前にあって現実になった。
走ることは好きだったし興味もあったから入部することにした。
———そこのクラブは、自分にあった練習内容をさせてくれる。
体力の無い人には「体力作り」からなど。
実力を高めたい人は「全力ダッシュ」などがある。
その中自分はまだなれていないから基礎的なのからやることにした。
ここのクラブにはたくさんの人がいてついて行くのが不安だった。
ところがそんなこともなく結構面白い人の集まりでやりやすかった。
最初に話しかけてきたのが『平岡　奈緒』という女の子だった。
この子はすごく美人で話すのも怖かったけど意外と面白い子で何でも話せる良いと友達になれた。
種目も短距離になり、奈緒と同じだったのでまた仲の和を広げていった。

だんだん話していくうちに男子とも仲良くなり『佐藤　達』や『矢本　友二』とも仲良くなった。
そして友二は長距離、達は短距離と言うことも知った。
そして一週間位してコーチから呼び出され自分は休憩室に行く。
その時に驚いたことを言われた。

「今の調子だと結構いいから、基礎的から発展式に移ってみないか？」
その時は驚いていたけどあえて言えばうれしい気持ちもあった。
言われたとおり基礎的から発展式に移って練習していた時。
いつもならキツかった１０００ｍダッシュも苦しくなくもっと走れるくらいの体力を身につけていた。
そして練習を何日も何日もしていくうちに、大会があることを知らされる。
自分にとっては初めての大会。　どうなるのか自分でも分からないまま月日は流れてしまった。

陸上との出会い（後書き）

次回も読んでみてください。

初めての大会

――――５月２９日ついに大会の日。
初めてということもあり緊張していた。
自分は１００ｍ　２００ｍ　８００ｍ　リレーにでる。
特に心配なのがリレー。
バトンパスが苦手だからと言うことでアンカーにさせてもらった。
だけどアンカーは、はっきり言って一番貴重。
今まで頑張って走ってきたみんなの気持ちを背負って走る。
そんなことを思うと足が重くてなにもできなくなる…
ただし、今回は男女混合だから少しは何とかなる。
そして１００ｍ競技の番が来た。まだまだ準備が整ってないけどレーンに行くことにした。
その時同じクラブの『依田　拓也』が話しかけてきた。
「リレーの事考えてんだろ！今は個人もちの競技に集中しな！
リレーは混合だし気にしなくて大丈夫だよ！」
その言葉で緊張感がなくなって気軽になった。
そして列ごとに名前が呼ばれる。
審判の「いちについて――――」「よーい――――」で走る準備。
「ドン」でみんな一斉に走り出した。
最初は3位くらいだった自分がだんだんに人を抜かして一位になった。
走り終わった後のみんなの歓声。　走ってる時は感じない何位かの実感。
そしてついに結果がでる。　【１４″４８】　この表示が出た時にうれしくて騒ぎまくった。
でも、たかが１００ｍ。まだまだ余裕は無い。　２００ｍ　８００ｍ　リレーが残っているのだから。
――――そして他の女子も走り終わって２００ｍ競技に移るとき

だった。
いきなり知らない人に話しかけられた。
「君はさっきの１００を走った…」と言って口をとめた。
「うん、期待しているよ！頑張ってね！」　その一言が理解できずにいたが
「ありがとうございます」と言い残して競技まで急いだ。

――――――２００ｍ競技。
さっきは最初に走ってた自分だけども次は最後らへんに走る。
だから初めの方はベンチに座って他の人の走りを見る。
その時に奈緒の姿を発見した。　次に走るのは奈緒らしい。
「頑張れ」その一言を言おうとしたけど言えなくてずっと見ていたら達と友二が来て
「どうだった？」と聞かれる。
２００はこれからと答えた後に友二が　「次、奈緒じゃん」と言った後「頑張れー」と言った。
その言葉に気付いたのか奈緒はこっちを向き　「ありがとう！」と言って手を振る。
そして始まる。「位置について」「よーい」その瞬間を見逃さなかった。
奈緒の目が変わったのを…　「ドン」と言う音と共に奈緒は走り出した。
奈緒が走っているときずっと目が追っていた。
――――なんと到着は一位。その結果を見た後に達と友二は「行こうぜ！」と言って走り出した。
その後に続いてついて行く自分。奈緒がこっちに気付いた時に「奈緒すごいよ！」と言った。
そしたら「ありがとう！でもまだタイムが…」と不安そう…
「大体で計ってたら２４秒だった！」　と友二が言うと「本当！？」と言った。

そして「２８″７８」と言う達。
「すごいね！もう分かったんだ」と言うと「もう結果出てるよ」と言い結果版を指す。
見てみると　【２８″７８】　と言う表示が出ていた。奈緒は嬉しそうに喜ぶ。それもそうだろう。
自己最高記録を出したのだから。　それを見てすごくうらやましかった。
でも、その時に敵対心も持った。だけど走ることにしては仲間とか関係なしでただ走ればいい。
そんなことを思った自分は「奈緒ー！うらやましいぞー！」と言って奈緒の手を取った。
ところが友二に「次お前じゃね！？」と言う一言でハッとして我に返る自分。
「あっ。そうだ…やべぇ」そう言って走り出そうとしたら「悠には叶わないよ！だから頑張れ！」
と言ってくれた。それを聞いて自分が今いなきゃいけないところの場へ行く。
――――そして3人が見守る中自分は走り出した。
何の感情も無く、何も考えないまま…結果はあまりよくない気がする…
2位到着…あまり心地いいものではなかった。
そして結果が出された時に「ねぇ…」と声をかけられる。
その人はさっき一緒に走って勝てなかった相手だ。
「どうして？」いきなりそんなことを言われる。
意味が分からないので「何が？」そういうと「えっ…気付いてないの？」と言う。
いきなりそんなことを言われて気付く人はいないと思いながら「分かんないけど？」と言うと
「あたし、アナタのこと押したの…気付かなかった？」と言われる。
……押した？そういわれると後半、左側に何かが当たってペースダ

ウンしたような…？
「そうなんだwわざとじゃないでしょwそんなの。気にしなくて良いよ」と言ったら向こうは
「そんな…わざとだよ。１００m競技見ててあなたには勝てない気がしたから…
だからわざと押したんだよ…」
「いいよ！そんなの黙ってて！最初から２００も走る体力無かったからね！」と言った。
その後も話して向こうは誤りはじめた。
そんなの気にしない自分は簡単に話を終わらせた――。
そして個人種目が最後の競技８００m。　結果は見事な一位。
最後に残っていたリレーも何とか一位。
スタートが友二、次は奈緒、次が達、そしてアンカーがうち。
なんとか繋ぎきったバトン。　プレッシャーに負けないで走りきった結果が一位。
その瞬間みんなが駆け寄り喜んだ。
そして最後。
表彰式。

――――――――――――――――
女子共通１００m一位１４″４８
女子共通２００m二位２７″５８
女子　８００m一位　２′６８″４３
共通４００mリレー一位　５５″３２
――――――――――――――――

と言う結果になった。
そしてある１人の女子が口を開いた…
それは２００mの時に話した美智流さんだ。
「待ってください…」そして審査員が「なんですか？」と言ったとき
「２００mの結果は正しくありません。私は悠さんを押して一位になりました」

その瞬間周りがざわめき始めた。審査員も唖然としている。
そして　「そうなんですか？尾原さん、押されたんですか？」そう言って自分に問いかけられる。
「いいえ。押されてません。」そう言うと審査員の人は戸惑う…
「もし仮に押されたのならその場でバランスを崩し転んでるはずです」
と言うと「う～ん…」と審査員もすごく戸惑っているようだ。
自分は呆れて「あの、本当に押されてませんから。結果は間違ってません。」
そう言ったのに審査員の人達は「でもねぇ…」と言う。
「本人が押されてないって言ってるんですから押されてないんです。」
審査員の人も　『確かに…』と言う感じな表情を見せ　結果はそのままで変わらなかった。
（そのままなのはふつうの部活とかのように厳しくないから）
その時に「どうして…」と美智流さんが小声で言ってるのが聞こえた。
その声に気付いた自分は横目でチラッと見たが聞こえないフリをしていた。
下を向いていて今にも泣きそうな表情。
声をかければすぐにでも泣いてしまいそうな感じだった。
だからこそ話しかけないでそのままに――――。
帰るときは美智流さんが「ごめんなさい」と言った。
表情はまだ泣きそうな感じ。
「気にしない！」その言葉を言った瞬間美智流さんは「ありがとう」と言った。
他に何か言いたいのか目はまっすぐに自分を見る。
「あの「次の大会は…」同時に話し始めてしまったが自分は続けた。
「次の大会は…正々堂々とやろうね」そういうと「うん！」と言い私たちは別れた。

初の大会にしてこの結果。結構嬉しい気持ちがある。そして大会も終わり、
少し安定した日が続く――――。

初めての大会（後書き）

次回も読んでみてください

駅伝大会

中学２年。７月くらいの出来事だった。
大会が終わってシード権を取った自分たちのクラブは駅伝大会の出場を許された。
その時に出るメンバーを選んだ。もちろん前回の大会で高成績を出した者だけが出る。
その中で選ばれたのが
「尾原　悠」「平岡　奈緒」「佐藤　達」「矢本　友二」「小林　悠磨」「佐藤　翔太」「馬場　朱音」
「土屋　伶汰」「平原　萌」「浅海　剛」の１０人になった。
今回は１０区までの選手登場で男女混合の大会になる。

７月１４日。
駅伝大会が始まる時。
今回は区間で距離がかわる。
そのために誰が何処の区間を走るのかはちゃんと決めなくてはならない。
そして一週間掛けて決めたメンバーが

１区　土屋　伶汰
２区　馬場　朱音
３区　平岡　奈緒
４区　浅海　剛
５区　佐藤　達
６区　矢本　友二
７区　平原　萌
８区　小林　悠磨
９区　佐藤　翔太

１０区　　尾原　悠

に決まった。最悪な時点でアンカー一番距離の長くてプレッシャーの高い区間だ。
でも、コーチも皆もそれでＯＫと言ってくれた。
だからめげずに頑張ることにした…ついに始まった駅伝大会。
中学生の部ということも合って距離は大人ほどではない。
実力もまだまだだから距離は短い。
だけど元は短距離選手である自分がいきなり長距離の駅伝に出る。
それが一番の不安だった…
でも、コーチが「お前なら出来る」そういうからその期待にこたえてあげたくて、
皆の思いもつまった襷を受け取りたくてアンカーを引き受けた。
第１区の人が走り始めて少したった。３ｋｍだけ合ってみんな早い。
だんだんと順位が来る中、一人の選手が体調を崩した…
それは５区を走る達だ…
５区は２番目に貴重な場所…
そこで達が下りたら棄権になってしまう…
そしてコーチはウチに話しかけてきた…
「５区、走ってくれないか…？」
そして達が苦しそうにしているのも見て断りきれずに「はい…」という返事をした…
だが５区の番はすぐに来て今からスタートレーンに行かなくちゃ行けなくなった…
そして４区を走っていた剛が襷を手で持ってつらそうな顔をしながら来た。
――――――その襷を受け取って走り出した自分。
５区を走るのはほとんどが男子で抜かすのは難しかった…
男子と女子の実力の違いは大きすぎるから…
それでもめげずに行くと自分の得意とする上り坂のコース。
ここでほとんどの選手はペースを落とした。

ところがその反面、一人の選手だけは逆にペースを上げていた。それが自分。
上り坂だけが得意なだけだけど結構人を抜かせる。
――――――――そのあとも６区の人に襷を渡すまでの距離は上り坂が多く
上位１位で６区の人に襷を渡せた。
でも、はっきり言ってウチのチームは６区以内からは皆長距離選手でペースが速い…
あまり休む時間が無い自分はすぐにアンカーレーンに急いだ。
車に乗ってる時もコーチに「よく頑張った！」「ありがとう！」そんな言葉を貰いながら…
そして１５分くらいしてアンカーレーンに来た。
まだ疲れが取れていない自分は脹脛がパンパンで歩き方がフラフラになってしまう…
アンカーということだけで練習してきたから疲れからの回復の方法が分からない…
足がフラフラするのも耐えてアンカーレーンに行く。
そしたらもう９区の翔太が向かってきてる…
やばい…まだ走り終わってから水の補給もしていない…
脱水症状になりそうな気分…
そんなこと思っていても遅く…
襷を手に持った翔太が向かってくる…
「行け！頑張れ！」
そんな言葉を残して襷を受け取った…
スタートから上手くいかず、疲れの残ってる足を動かす。
――――１０区を走る自分へのプレッシャー。
そして最後まで走り遂げれるかの不安がたまっていってしまった…
まだ疲れの取れていない足で何処までやれるか、
Ｓｈｏｒｔ　ｄｉｓｔａｎｃｅ　ｐｌａｙｅｒの挑戦が始まった…
――――そしてなんとか保ち、何ｋｍか走りきった後異変が起き

始める。
目の前がクラクラして道がずれてる。
そしてその瞬間に膝と腕に激痛が走る。
――そう、倒れてしまった…その時に車から見守ってたコーチが降りてくる。
だけど、コーチが選手に触るとアウト。
棄権の合図になってしまうから…
まだ走れるし今棄権したくないと思いコーチが近づいてくるのを拒否した。
――――――そのあとはまた走り始めて半分以上は走りきってる。
あと２ｋｍ！その嬉しさとともに後ろから誰かが来るのが分かる…
だけど残りの２ｋｍはほとんどが上り坂という現実。
他の選手はさっきと同じように上り坂でペースが少し落ちる…
その時、自分のペースが上がるのが分かる。
さっきまで後ろに居た選手との距離が１５秒。
結構離した。そのあともペースを落とすこともなかったが思わぬ事件が起きる。
地面のひび割れの間の大きな穴に足を取られた。普通じゃあり得ない事件…
なぜそこに大きなひび割れがあったのかは自分でも分からない…
その時、コンタクトのつけ方が甘かったのか取れてしまい視界がぼやける…
元から視力の悪い自分には悪夢になる…後ろから選手が来ているのを見えないがままに気付かず、
なんとか足を抜こうとした時に無理やり引っ張ったのが運命を変えた…
足首を思いっきり切ってしまい血が出てくる…
視力の悪い自分はその時挟撃な痛みに襲われたが
何が起きたのか分からないので抜けた足をなんとか立たせて走り出した…

あと５００ｍのところだったのに、足を取られてる間に１人の選手に抜かされてしまっていた…
差は１９秒…
あと５００ｍの時点で抜かせるか抜かせないかの大きな賭け…
それでもまだ上り坂であったためなんとか差を縮めていった。
だけどさっき足首を切ったキズが深かったため、出血がひどく足に力が入らなくなる…
それでも、あと２００ｍの時点…諦めずに走った。その結果何とか前に居た選手を抜かし１位に戻った。
―――でも、それはすぐに逆効果になりゴール直前で足首に力が入らず転んでしまった…
そしてさっきの選手は「よっしゃー！！！！」と叫びながらゴールしていく…
それに悔しさを感じてすぐ立ち上がりあと１ｍを走りきった…
でも、足が持たずゴールしてすぐ転んだ。そして泣いた…。
皆すぐに駆け寄ってくれた。そしてウチはひたすら謝った…
せっかく一位でつなげてくれた襷を２位という結果にしてごめんねって
転んで無きゃよかったのにと…
チームの皆も一緒になって泣いて
「悠のせいじゃないよ！」
と言ってくれた。
「その足首でよく頑張った！」
「まだ疲れてたのによく走りきった！」
そうやってほめてくれた。
コーチも泣きながら誤ってきた…
「状態も知らずに走らせて悪かった…
Ｓｈｏｒｔ　ｄｉｓｔａｎｃｅ　ｐｌａｙｅｒが長距離に慣れていないのにいきなり２回もの…
しかも長い距離を走らせて悪かった…ほんとにすまなかった！」

声が震えてるから泣きながら言ってるのは分かった。
それでも
「自分のせいですから！皆のせいなんかじゃありません！
ましてはコーチも関係ありません。自分があそこで引き受けたですから」
そういうと皆はまた泣き出した…。
足首が切れてるのも知らない自分は一回足首を掴む…
色んな所に血が垂れてるのも気付かない…
ましては今も出血してることは誰も気付かなかっただろう…
足首を掴んでた手を離す。血がついたのも気づかない…
汗で全身が濡れているようなものだったから…
気付かないうちに手についたたくさんの血で顔の汗を拭いてしまって顔が赤くなる…
それに気付いた奈緒が自分の愛用していたタオルをウチの顔に近づけて拭いてくれた…
そして水道へ行って3つタオルを濡らしてきてくれた達が一つのタオルを使って顔を拭いてくれる…
奈緒が足首を濡れたタオルで拭いてくれた。
みんな心配してくれてなんとか治療をしてくれた。
そして後になってコンタクトが取れてる自分はバックからメガネを取りかけた。
そして初めて気付いた。
足首がものすごく赤いのを…
そして道にも血があちこちに垂れているのが…
こりゃヤバイと思い、すぐに濡れたタオルを用意して地面に水を掛け血を滲ませた。
皆も手伝ってくれてすぐに終わった。
そしてそのあとは医者に呼ばれ足首の治療をしてもらい膝と腕の消毒もしてもらった。
そして、治療が終わったときに指定のウィンドブレイカーを上下着

てチームごとに集合して並んだ。
そして結果発表。結果は
――――――――――――
区間特別賞
――――――――――――
第一区　土屋　伶汰
第二区　道川　豊
第三区　今井　春
第四区　朝道　冷夏
第五区　尾原　悠
第六区　矢本　友二
第七区　実花　由里菜
第八区　山本　涼
第九区　佐藤　翔太
第十区　露谷　貴史
――――――――――――
総合　第二位
――――――――――――
という結果になった。
自分らは第二位になった。
その結果発表してる時にいきなり倒れた…
足は麻痺して上手く立てないのだ…
立とうとしてもすぐに足がぐらつき立てない。
それを見た大人達が駆け寄ってパイプ椅子を用意してくれて座らせてくれた。
麻痺し立てなかったのは、出血が原因だったらしい。
出血してるのにも関わらず走り続けてたことで足が疲れたんだとコーチは言った。
そのあと、なんだか審査員どうしで話し合いをしてる様子。
そしていきなり審査員の方からの報告。

――特別賞として、「尾原　悠」さんに！賞状を与えたいと思います！
その言葉を聞いたときに普通の人なら「なんでー！？」「ずるい！」という人がほとんどだろう…
ところがそうではなく、
「さすが～！」など「やっぱりな！」などのほめ言葉がたくさん聞こえてきた。
皆ウチが走ってる時に映し出されてたモニターで走りを見てたらしい…
それで感心して泣いた人もいるとか…それと同時にみんなからの拍手で嬉し涙を流す自分…
嬉しくて審査員が話してるときも泣いていた――――普通ではありえない特別賞。
普通の陸上部とかの大会ではもちろんありえないだろう。
――――帰るときには少し安定して歩けるようになった。
そしてバスになるとき――「尾原さん！」と話しかけられる。
それは総合1位をとったメンバーだった。
そして「いい走り見せていただきました！ありがとうございました！」
そういって皆一斉に礼をしてくれた。
そしてアンカーで1位争いをした「露谷　貴史」が頭を下げて
「ありがとうございました！」という。
そして「ゴール前でよっしゃーなんていってすんませんでした！」
と言ってくる。
それに対してウチは
「悔しかったけど、一位のときは嬉しいものだからねwいいんだよw普通言うよ！誰でも！このうちでもね！」
そういうと「ありがとうございました！」そういって
「またトラックで一緒に走れること楽しみにしています！
今度はＳｈｏｒｔ　ｄｉｓｔａｎｃｅ　ｐｌａｙｅｒ同士で走りま

しょう！」
そういうと礼をして行った。
そして始めての駅伝大会は2位と言う結果だけども思い出になる大会だったと思います。
諦めずに頑張ることの大切さを知らされる大会だった――――――。
――――――――そして一回クラブに集まってみんなでウォーミングアップをしてる時
コーチに呼ばれ話をしていた…
「今日はすまなかったな。いきなり5区も走らせて…」
本当は同選手2回走るのは禁止。
でも、これは部活とかと違い規則は厳しくない。
そのあと、「足首…悪かった！申し訳が無い…」そういう。
「平気です。あの場じゃあ走れましたしね。しかも足首なんか平気です。
走ってる時気付かなかったしそんな大したことはないんですよ（笑）」
「そうか、本当にありがとう！なんとか2位だな。最後は惜しかった。
出血が無けりゃ平気だったのになぁ…」という。そんなような会話が続いて結局は終わった。
初めての男女混合駅伝大会。
苦しい思いをしながら走りきった時の最高に嬉しい思い！
また一ついい思い出が出来て最高な日になった。そう実感していた。

駅伝大会（後書き）

次回も読んでください

走れなくなる絶望

陸上というスポーツを始めてもう2年が過ぎた。
今までに何回か大会にも出て高成績もたくさん残せた。
まだまだ自分はやれるのかな。そう思っていたときだった。
今までにない最悪な事実を知らされるのは…
――――――――1月の中旬。
皆で練習してる時のことだった。
久しぶりにハードルをやっていて楽しんでた。
そろそろ飽きてきてハードルを片付けてた時、
倉庫に運んだ後出ようとしたら何かに引っかかり足首を浅く切った。
きっとどっかからか木が突き出てたんだろう…
でも、浅い傷と言っても結構血が出てきてたので手当てをしてもらうことにした。
その時いきなりコーチに呼ばれる。
その内容がどれほどの絶望を自分に与えるのかそんなこと誰も理解できなかった…
休憩所に行き、コーチと1対1で話し合いが始まる。
重い空気。
なんだか嫌な感じがすると思っていた。
「いきなり呼び出してスマン。だがな、そろそろ言わなきゃいけない事があるんだ…」
その時のコーチの表情…言っていいのか、言わない方がいいのか…
まだ迷ってるかのような表情をする。
「なんですか？」
そして決意を決めたのかコーチは話し始めてた。
「この前、一人一人が審査しただろう？」
審査…その審査は今から2週間前の事。
皆の今の足の状態を見るために行った審査の事。

「それが？」…。
コーチは右手で自分の顔を抑え言っていいのか迷っている。
だから「言ってください。」と言った。
そして…「その審査でお前だけが引っかかったんだよ…」と言われる…
自分だけが引っかかった…
自分だけがその審査に…意味が分からなく「なんでうちだけが…」と聞くと
「その足にしたのは俺の責任だ…悪かった…でもな…」
一旦言葉をとぎった。そして「お前は足に限界がきてる。
このまま走り続けると走れない足になる。」
そういわれた瞬間、罪悪感が頭の中をグルグル回った…
「走れないって…なんで」
「わからん。ただ症状は最悪だ。二度と走れない足になりたくないだろう？」
「もちろんです」
「じゃあ治療して、まずは足を治せ」
「わかりました」
「無理をしたら足の命は無いと思え」
「…。」
「悪い…本当に悪かった…俺のせいで」
申し訳なさそうに言うコーチの顔を見るのがいやで窓越しに見える皆の走る姿を見ていた。
そして聞いた。
「治らないんですか？」
「いや…治るっちゃ治る。だが手術になるだろう…」
手術…一番嫌いな言葉…でも治ると聞いたから
「手術すれば前みたいに走れるんだ…」
「…いや、治るは治るが、走れるようになるかは…人それぞれだが俺にもわからない。

でも、走れなくなるとしても『陸上』として走れなくなるだけだ。」
陸上として走れない。
中学一年の5月から始めた陸上。
それを走れない。
じゃあ…それだけの理由で陸上を諦めるという事になるのかな…？
「なんでお前は陸上部として入らなかったんだ？」
いきなりコーチから言われた一言。
一番聞かれたくなかったこと…「それは…」言おうか迷ったが言葉を止めていた…
「陸上部としての活動ならばここのように厳しい練習はなかったんだぞ？
特にここは男子に合わせた練習だから女子には辛いだろう？」
「……。」
「それでもここに来てる女子は確かに頑張ってる。
だからこそ今は男子と同じくらいのレベルのヤツが多い。
お前もその一人だが…俺達大人の中ではお前の実力をほしがる人はたくさんいる。
高校でも必要とするやつもいるだろう…」
「高校？今そんなのどうでもいいじゃん。」
「お前が陸上部として入ればお前の学校の陸上部はもっとレベルが上がるぞ？
可能性ではお前だけでもずっと上にいける。なのになんでクラブなんだ？
特にいいことも無いのに。陸上部のほうがもっといいところまでいけるんだぞ」
さっきから言う陸上部、陸上部の一言がむかつく…そんなの陸上部がえらい？
そんなにうちを陸上部に入れたい？ふざけてる…
「今からでも陸上部に入「うっせぇよ」
コーチが話してる言葉をとぎる。

「陸上部が何なんだよ。知るかよ。確かに陸上部として入れば
もっといいところにもいけるし一人だけでもいいトコにもいけるかも知れない。
でも、陸上部には入らない。」
その言葉を聞いてコーチは唖然とする。
きっとその時のうちの目はいつもと違ったんだろう…
陸上部として入らない理由…それは言わない。
別に過去のことを引きずってるわけではない。
ただ、ある理由があるから――――
・
・
・
・
・
駅伝大会。あれが最後に走る大会になるとは思わなかった。
もう一度…もう一度だけ走れるのなら最後の大会を…
・・・コーチとの話し合いが終わり一人休憩室で窓越しに走る皆を見る。
椅子に座りながら窓に左頭を当てながら…
そしてさっき切った足首から流れる血を気にせず壁に足首をドンドンとぶつける…
ポタポタと足から落ちる血液…それも今じゃ全然気にならない…
ただ走れなくなるぞといわれた時の大きいショック…
走る事が本当に好きだった自分への選択肢。
『クラブを辞める』
『手術をやる』
どちらにしろ良い結果にはならない。
だけど陸上として走れないだけならば今の足でもいいと思った。
だから決めた。
クラブを辞める事を

――――――――――本当に走れなくなった事実…
コーチは自分のせいだといった。
それの本当の理由を知るときは…
いつ来るのだろう…

走れなくなる絶望（後書き）

次回も読んでください

コーチの思い

――――走れなくなるかもしれないと告げる前…
コーチはどんな気持ちだったのだろう…。
駅伝大会の時からコーチの様子はおかしかった。
やけに練習の時も気を使っていたし…。
その理由がまさか走れない足になるかもしれないと言うものだとは思わなかった。
『膝が痛い』きっとこのときから足は悪くなりつつあったんだと思う――――。
学校の時でも膝の痛さは続いていた。
だから陸上部の人や先生にも相談してみた。
でも返ってくる言葉はすべて同じで「走らない方がいい」だった。
中１の時のキャンプでも左膝を故障しており、班の人に迷惑をかけていた。
ずっと一緒についていてくれた人がいた。
荷物も持ってくれたりもしていた…。
きっとその時はすでに足が悪くなっている時期だったのだろう。
その時の先生もすごく気をつかっているのが分かった。
クラブでもコーチの態度が変わった。２００６年８月下旬。
コーチと誰かがはなしているのを聞いてしまった。
練習していた時のこと。リレーの練習が終わってバトンを片づけようと、休憩室まで行った。
その時に窓が開いていて声が聞こえた。
「この子のことですけど…」
「あぁ、もしかしてアレですか？」
「そうです。今はどうですか？」
「あまり走らせないようにしてますが…難しくて…」
そんな会話をしていた。

そして疑問に思った。
『この子』わざわざ名前を出さなかったコーチと話してる相手。
すると袋の音が聞こえた。何かを袋から出している音…。
「この薬を渡しておくので、もし今より悪くなりつつあるのなら使ってください」
と言ってから
「私はこれで…」
と言い、立ち上がるときにするイスの音が聞こえてとっさに今いる場からバレないように隠れた…。
「本人にはまだ何も言わないで、もっとひどくなって走るのも辛そうになったら…
言ってあげてください」
「でも、それじゃ遅いんじゃ？」
「構いません。今はもっと楽しく走りたい時でしょうから…
それとまだ中学一年です。暴れたい時期でしょう」
「……そうですね……。わかりました……」
最後に二人がした会話。
まさか自分が走れなくなる足になるなんて思わなかった。
違う人のことだと思っていた。
その後コーチと話していた人の姿を少し見た時に白衣のようなものを着ていた。
そこからどこかの医者だと言うことは分かった。
医者とコーチの接点を考えていたりさっきの会話の意味を繰り返し考えてみたりしてから、
もう１０分は経ったと思う。
そろそろバトンを返しに行こうと思い休憩室へ。
そしてドアを開けてから「やほー」とテンションを上げて中へ入った。
コーチは何もなかったかのように明るく「おぉ！」と言った。
そして机の上にある薬品の袋を３つほどみた。

そして「その薬…ま、まさか！？」と驚いたフリをしてから
「コーチ…酒の飲みすぎで！？」と言った。
「バカか！俺はまだ２９じゃ！酒で病気になる年じゃねぇ！」
「へぇ？３６の間違えだぃ！」
「いや～３２ね！３２！勝手に年を変えないの！」という。
「勝手に変えだのどっちだよ！」と笑いながら言いバトンを机に置いて袋を手にする。
袋を手にしたときに驚いた。
「名前…ウチじゃんか」
そう。
そこに書いてあった名前はうちだった…
「お前、酒の飲みすぎじゃね！？」とコーチは言う。
でもコーチの表情はすごくひきつってる感じだった。
それを見ても
「ハッハハ。まだ未成年かな！？」と明るく振る舞う自分がいた…。
きっとこの時も自分が走れなくなると言うことは思っていなかったからだと思う。
薬を手にするコーチ。そして「この中身はちゃんと全員分ある。中一のキャプテンのお前の名前を代表に書いてあるだけだから。」と言った。
それでも疑問は途切れを知らない。
あのコーチと話してた相手は、いったい誰だったんだろうか…。
今、コーチが言ったことは本当なのだろうか…。
種類の違う袋…。
本当に他の人の分もあるのだろうか…
袋が小さすぎる気もするし…
ずっと袋を見ていたらコーチが口を開いた。
「何見てんだ？まさか俺のことを！？（笑）」
と冗談で言ってくる。
そして袋を手に持っていた方を隠すかのように後ろへ持ってく。

そのあと
「あんま考えすぎんなよ。後で後悔する様な考えは捨てろ」
と言い、ウチの頭に手を乗せ髪の毛をグシャグシャにする。
『後悔するような考えは捨てろ』
その言葉で少し不安感は消え、いつものように練習を再開させた。

――――――きっとコーチはその時の言葉を後悔していないんだろう…
『後悔しない考え』
それを教えておけばあの薬の事も忘れてもらえる。
『俺が言った事も嘘かもしれないだろ』と言う希望があったんだろう。
『走れないと知った時の後悔』
もし今自分の中でその一言があったら走る事も嫌になってしまう。
だからこそ言った一言だったのだろう…

簡単に言えば…
それを教えておけばこの先、何があっても乗り越えられる。
そう思ったんだろう…。

でも、今思えばその考えは甘いと思った。
だって自分はそこまで強くはないから…
人よりは努力はしてるつもり。
でも、「努力」は強さじゃない。
コーチは間違えてる。
きっと人の努力を強さだと思い込んでるんだ。
だからあの時ちゃんと言わなかった。
「走るのは当分やめておけ」って…

コーチの考えが分からなくなる…
コーチの思いが分からない。

それとも自分が理解しようとしてなかったのかな…。
あの時のコーチの思いを…考えを…。
自分が理解してあげないと今のコーチの考えは分からない。
でも、コーチももっと分かるように言ってくれれば…
頭の中に「コーチ」の3文字が続く…
コーチ
コーチ
コーチ…
嫌になってくる…
だってもしかしたら自分かもしれないんだ。
もしあの医者らしき人とコーチが話してた『あの子』
がウチだったら…
そんな考えをしてるともっと分からなくなってしまう…
でも…
でも、もしあれはウチじゃなくて他の人だったら?
その方が嬉しい。
自分じゃない。他の人。
そうだ。まだ分からない。
他の人の可能性はある!
ただ自分だけで『うちの事か…』なんて思ってたら先には進めない。

だからこそ決めた。

『まだ分からない未来はそのまま』
『今考えてどうにかなるものじゃない』

そう考えていたら気持ちもすっきりし
不安感も無くなった。

走って走って…走って今より不安感を全てなくしてやろう。
そう思い全力疾走するかのように走り始めた。

そのおかげで不安感はなくなり自分を安定させる事ができた。

――――――結局コーチの思いは…
分からないままだったが…

でも、
いまは良い。
そう思えたからだと思う…

まだコーチの思いは知らないほうが自分のためにもある。
そう思えた。

だからコーチの今の思いを聞かない…
考えないようにした。

コーチの思い（後書き）

次回も読んでください

もう一度

もう一度だけ…もう一度、希望を持ちたい。
もう一度だけ、走ってみたい。
出来るところまでやってみたい。
限界を超えてまででも…
もう一度だけでも走れる足に…
叶わないことは分かってる。
でも、希望を持てば出来る。
そう思いこんだ自分が「もう一度走りたい」そう願った。
だからこそ…だからこそ少しだけでも…たった少しでも最後に走れた喜び。
その時はすごく嬉しかった。

コーチから走れなくなるといわれてから自分がやってきたこと…
『辞める』そう決意してもなかなか辞められない自分が居た…
そのことをコーチに話したら
「お前はそれほど陸上という競技がすきなんだよ。だから無理に辞めることは無い。
ただ走れないだけで辞める必要はないだろう」
そういってくれた。
『辞められないくらいに好き』
その言葉に自分でも驚いた。
だって、いままで…そこまで夢中になることも無かったのに…
コーチに言われて初めて実感する。
『自分は陸上が好き』ということを…
ここまで好きなるとは思わなかった。
走れないといわれた時ははっきり言って諦めてた。
でも、少し希望が見えた。

その希望を表し始めたのは自分。
自分が見つけた希望。
何もすることのなかった自分が初めてやったこと。

それは足に無駄な刺激を与えないようにマッサージをしたりしたこと。
病院へ行って治療してもらってたこと。
それを繰り返してみたら足は楽になった。
約1ヶ月ほど続けていた2つのこと。
たった1ヶ月でこれだけ良くなるとは思わなかった。
少し感動した。この1ヶ月間何も考えずにいた。
ただ自分の足にマッサージや治療をしてもらっていただけなのに…

その嬉しさが大きく出て、また走れるようになった。
でも、完全に治った訳ではないので無理はしすぎてはいけない…
そのことだけ自分の中に閉じ込めておいた。
無理したら一回走っただけで今までの努力はなくなってしまうから…

だからちゃんと自分の中で『無理はしない』と決めてもう一度走ることを決めた。

――――――全然走ってなかったからすごく鈍くなってるのが自分でも分かる。
体力もなくなって最初に戻ったかんじ…

ちょっとショックだった…少し走らなかっただけでこんなにも変わるなんて思っても無かった…
それでも完全に1からやり直しではない。
少しは体力あるし、走り方も覚えてる。

一発目から全速力で行かないで少しずつ…少しずつ頑張っていこう。
まずは実力の三分の一の速さ。
大体マラソンで走る速さでスタート。
そこから少しずつペースを上げていく。
そうしていくことですぐには足に刺激は来ない。
これなら長く走れる。
次にある大会にも出れるかもしれない。
そんな期待を抱きながら練習に励んだ。

何日かして、足に痛みは来るけど走れる足に戻っていた。
クラブが始まる前と終わったら病院へ治療しに。毎日家に帰ったら
マッサージ。
それを毎日のように続けていた。
だからこそ今の足がある。
少しでも走れるようになった足。

やっぱり陸上として走れない足は嫌だ…
趣味や急ぐ時だけに走る足なんていらない…陸上として走りたい！
陸上の選手として他の人と走りあいたい。対戦したい。
それほど走ることが…陸上が好きだから…

希望は誰かがくれるものと自分から開き出して見せるものがある。
そしてその二つを今自分は見つけた。
だからこそ少しでも走れる足になれた！
すごく嬉しいことでもあるし感謝の気持ちもある！

――――――もう一度走ることを許してくれた。

神様のおかげ？
――違う。
親のおかげ？
――違う。
支えのおかげ？
――違う。

じゃあ何？
そう考えると分からなくなる。
でも、言える事、
『神様は人を不幸にするだけじゃない。』
たまに…本当にたまに！
お願いを聞いてくれることもあるんだ。
そう。だからこそ希望をくれた。
一ヶ月頑張ったからこそ希望をくれた。
『――もう一度走るチャンスを』
でも、きっと神様にお願いするのなら何かを代償としなきゃいけないんだ…
その後悔はきっとまた後で来るんだろう…
でも今は…今は！走れた喜びでいっぱい！

もう一度走れる！
今の自分の足では何処までできるかわからないけど今は走れる！
その喜びがたくさん！
その喜びのおかげで練習しててもの足の痛みはあまりしなくなってきた。
逆に良くなってるようにも思えるほどだった。

――――――何日かして、大会があることを知らされる。
走れるようになった自分には嬉しい知らせだった。

――――でも、コーチはその喜びを消し去ろうとした…

コーチが大会の知らせを言った後、皆はまた練習に戻った。
そして自分も練習に戻ろうとした時、コーチに呼ばれる。
「悠、ちょっと良いか？」
その言葉を聞いた時に振り返りコーチのところへ行く。
そして大会について言われた…。
「今回の大会は…お前は出場させられん…」
その言葉を聞いた時体の力が全部抜けたかのような感覚に襲われる…
いきなり言われたコーチからの『出場させられん』の一言…

意味が分からなく立ち止まってるとコーチの口が開いた。
「悪い。でも、今の状態じゃ…出れないだろう…」
そんなことを言ってくる。
その言葉の意味が分からなくウチは反抗した。
「走れるじゃんか。だから練習にも出てる！今の状態？そんなの良いに決まってるじゃん！
だから走ってんだよ！」
そういうとコーチは「悪い…」と言う。

「嫌だね。絶対に嫌だ。走れるようになったんだ！だから大会に出させてよ！」
「・・・。」
「いままで頑張ってきたし、まだ走れる！コーチはウチが走れなくなる足にナルかもしれない事を
気にしてるんだろ！？でもな、今は平気。走れる。コーチに心配されるほどウチは弱くない！」
「・・・。」
「コーチは努力を強さだと思ってるんだろ？だったらウチは努力してる！だからこそまた走れた！
そんなウチは強いだろ？コーチが思ってる以上に強いだろ！だから走れなくなるかもしれないって
言われた時でも治療してなんとかここまで来た。それは努力があったからだよ」
そう言った時にコーチはやっと口を開いた。
「そうだ。俺は努力が強さだと思っている。だからこそお前を次の大会に出すか困ってるんだ」
その言葉を聞いたときに意味が分からなかった。
強さだと思ってる。
だったら次の大会に出してくれても良いと思う…
なのに出してくれない…
そんなコーチにだんだんむかついてくる…
「意味がわかんねぇ…」
そういうと
「お前は努力しすぎだ」
といきなりコーチが言い出した。
『努力のしすぎ』その言葉にすごくむかついた…
「意味わかんねぇよ！努力しすぎなんて見てる側に分かるかよ！」
そういって近くに合ったハードルを投げる。

そしてコーチがまた口を開く。
「悪い…」
またコーチが言った一言。『悪い』
その言葉にむかつき、古びたハードルを左手で殴る。
その時に古いだけ合って木がむき出しになっていた。
ちょうどむき出しになってるところに左手首を引っ掛けてしまい怪我をした…
流れてくる血液…
ポタポタ垂れる血…

そして
「お前、クラブに入ってから怪我することが多くなったな…」
とコーチが言う。
「怪我することは良いことだ。努力の証でもあるからな…」
その言葉聞いた時に左手首をコーチの目の前に差し出す。
「この血に誓ってやるよ」
コーチはポタポタ流れる血液を見ながら微笑んだ。
「分かった」
そういい納得してくれた。
「コーチに後悔はさせない。ましては自分にも後悔を残さない走りをしてみせる」
コーチはまた微笑んだ。
「お前は強いよ。このクラブに来た誰よりも。このクラブを変えてくれたのもお前だ。
お前が来てくれてから上位に入れるようになった。1位を毎回とれるようになって…」
「それ以上何も言うなよな」
左手首から流れる血液の速さが増す。
それを見たコーチは
「腕、上に上げとけ」

と言ったから言われたとおりに上に上げる。
血が下に流れてくる感覚が分かる。
ヒジまできてだんだん下に…
Tシャツに付きそうなときに
「血ーー！！！」
と叫びながらタオルで押さえられた。
それは奈緒だ。

リレー練習するからということで休憩室の前を通りかかったらウチ等がいることに気づき見に来たらしい。
そして血を流すウチを見てすぐタオルを持ってきてくれたらしい。
心配性の奈緒がやりそうなことだ（笑）

「コーチ！悠が血流してるのに見てるのはひどいよ！」
奈緒はコーチを怒る。
「悠！手当て！手当てしに行こう！」
そういわれタオルで左手を隠しながら奈緒に引っ張られる。

――――――そして奈緒が手当てしてくれてる時に言った。
「次の大会、悠がまた一番だろうね！いいなぁ」
一番。今まで上位に入ってた自分だけど…次ばかりはどうだろうか…
「どうかな？わかなんないよー今のウチは遅いからね」
そういうと奈緒は
「大丈夫！悠は期待の星だもん！」という。
そして
「手首、リストカットじゃなくて良かったね！」
という。
「まぁねwリストカットなんか怖くて出来ねぇ！」
というと

「えっ！？これわざとやったの！？」と聞かれる。
「まさか！わざとな分けないじゃん！怖いなぁ」
「だよね！良かった♪」
「練習戻ろうか」
そういって練習に戻った。
次の大会に向けての練習に励むために――――――

もう一度（後書き）

次回も読んでください

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5307d/

陸上との出会い

2010年12月4日04時49分発行